

失われた日本人の心

謙虚さに代表される「美しい心」を忘れつつあるのは国にとって大きな損失だ。そのことが日本を住みにくくしている一つの要因なのです。

その謙虚さの精神が薄れつつあるのと並行するように、己の才を私物化する人が増えてきています。

とくに人の上に立ち、他の手本となるべき、大企業のトップ、幹部、官僚、みんな人並み優れた能力に恵まれた人たちばかりです。それなのに、なぜ不祥事や汚職が後を絶たないのか、それは才を私物化してしまって、公の利でなく、私利私欲のために発揮したからです。

不祥事を起こしたエリートたちはみな、人並みすぐれた能力を持っていたはずで、熱意や使命感もあり、これまた人並み以上の努力をしたにちがいません。しかし肝心の「考え方」つまり、生きる姿勢、哲学や思想、倫理観つまり「人格」がゆがんでいるからです。

戦後の日本社会について言えば、リーダーの資質というより、リーダーの選び方自体に問題があったのです。つまり、人格よりも才覚や能力（聡明才弁型の人物）を基準に選ぶことを繰り返してきたからです。

人間性よりも能力、それも学業を重視した試験の結果で人材配置を行い、公務員上級試験の成績のよい人間が役所の要職やエリートコースに就くことが代表的な例です。

人格というより、才覚という、成果に直結しやすい要素を重視して自分のリーダーを選ぶ傾向が強かったのです。

たとえば選挙にしても、特に田舎では地元への利益誘導型の政治家を「おらが先生」として選出する風潮はまだ根強く、いってみれば、才と弁あれども徳乏しき人間を自分たちの長としていただきたがる。そんな傾向やメンタリティをいまだに払拭できずにいます。残念ながら悪い意味で保守的な考えは変わらないのです。才弁型の人物で言葉だけの変革をとらえ、そんな能力も人格も全くありません。地域社会が良くなるわけがありません。私利私欲のためだと思われても仕方がないのです。

かつて日本人は「大きなものの考え方」をしていたはずで、昔から「人格の高き者こそ高い地位に据える」このことは今日も十分通用する普遍的考え方なのです。

福沢諭吉、西郷隆盛、大久保利通、大隈重信、犬養毅など数多くの偉大な人がいたはずで、また各村や町には尊敬する人がいて自分の財産までも使って世のため、人のためにつくした人がいたはずで、

各村にはその功績に頌徳碑があるのです。ところが最近では町の中に汚職をし、疑われた政治家・県知事・市長を経験した者までそうしたものが全国各地に建てられている。

昭和に建てられたもののほとんどは自分の利権によってのものだと言われているのです。人格者でもなく全く重みもなくいってみれば邪魔物にしかすぎないのです。

現代の日本人はグローバルに物事をとらえるのはきわめて苦手で、目先にとらわれ生き方までもが小さいものしか見えなくなっているのです。

道徳の崩壊、モラルの喪失がいわれる昨今こそ、人の上に立つものには才覚よりも人格が問われるのです。

戦後の日本は、聡明才弁型の人物をリーダーとして登用してきました。人格的重みのあ

る人物は脇に置かれてきたのです。

今ここにきてさかんに言われるように政治家、官僚が日本を潰すことになっているのです。そのような書物もたくさん出版され同じ日本人として笑ってはすまされない情けないことです。教育・社会・環境・経済すべてが日本の危機的状態までになっているのです。

才の他には内的な規範や倫理基準に乏しい、人間的な厚みや深みに欠けた人物がトップに据えられてきたのです。

近年多発している組織のほとんどの不祥事(防衛省事務次官の問題、イージス艦の事故、食品賞味期限偽装の問題、不明な年金の問題、その他数多くの事件、)に組織のリーダーが記者会見し、その対応に長としての人格の重み厚みを感じることはありません「あってならないこと」「再発防止に努めたい」「申しわけございません」「調査中です」など一通りのことは口にしますが、用意した原稿を棒読みしたり、教条的な響きを感じるばかりか、責任者としての真摯さや誠実さはほとんど伝わってきません。

うるたえやごまかし、責任逃れ、事態にきちんと対峙し、自らの責任を認め、説明し、正すべきは正していこうとする重量感ある言動が見られなく、確固とした信念、哲学をもたず、物事の善悪、正邪を峻別する基準さえ持ち合わせていないのです。あれが社会のリーダーと呼ばれる人たちの振る舞いであるなら、今の子供たちが大人を尊敬も信用もしないのも無理はありません。政治家、大臣などの弁など子供たちはどのように感じているのでしょうか。ある中学生が大臣は各省庁を守る(弁護するための役割をする人なのですか?)のためにいるのですか?確かに最高責任者で守ることには変わりないのですが、意味がちがうのです。あるテレビの番組での質問、全くお話にならない限りです。

中学生にまで相手にされない国の姿なのです。

人の上に立つリーダーこそ才や弁でなく、明確な哲学を基軸とした「深沈厚重」の人格が求められます。「人間として正しい生き方」を心がける人でなくてはならないのです。

ここ数年前から企業においてはこのようなリーダーの見直しがされてきています。また教育もされてきています。もちろん一流企業のトップといわれる人の中には尊敬される優れたリーダー、能力のみならず人格ある人間、賢い人間であるだけでなく正しい生き方、生きる目的、哲学をもってより重厚な人格を有した人物も数多くいるのです。代表する人物は松下幸之助、井深大、本田宗一郎、豊田喜一郎、豊田英二、大野耐一、稲盛和夫、若松義人、盛田昭夫、御手洗富士夫、孫 泰蔵、三木谷浩史など上げればきりが無いほどの人が過去、現在も誠実に生きているのです。セミナーなどで経験されるように、それらの人は多くを語らずとも一言一言に重量感があり、まさに相手を感動させる力があるのです。

それは自身が本当に苦労し仕事の中から生み出された生き方、考え方、信念、哲学を持っているからです。

ましてや尊敬に値する人格あるリーダーの中に現政治家、官僚は全くいません。なぜなら私利私欲に加え才や弁にたより確固とした信念の基で生きていないからです。人間性よりも学業を重視した戦後日本の人材配置の結果が招いた副産物になっているのです。

なぜそのようになってしまったのか官僚になったら自分の将来が決まってしまう(役職、給料までも)からで努力も進歩も極端に言えば毎日上司から言われることを、同じことをしていれば良いのですつまり自分の生活には全く関係ないのです。

逆に企業に於いてはまさに生き残りをかけ自らの才能、能力を生かし全てが競争の中に入り自分の努力以外に何も無いのです。毎日改善を考えた業務を行い他社と同じことをしていたら勝ち組にはなれないのです。自分を磨き一步でも先を見通さなければならぬのです。社長からいつも私に口癖に言われていたのは一人前の仕事は誰でもする、効率的に短時間でやればお前なら三人前は出来る。「汗を流すな、頭を使え、時代を先取りしろ」まさに今現在も通用することなのです。

無論責任ある立場になれば社の存続、大きく言えば明日の部下の生活が自分にかかっているのです。また、自分の努力により成功すれば逆に高額所得者になるのも企業の間人なのです。つまり、一流の大企業になると部長級で官僚の数倍の所得になるからで、このことも企業内で格差に対する問題にもなっています。その格差が私利私欲になり官僚の天下りや汚職の一因ともなっているといわれているのです。若き起業家の中には年収数億円に達する人も数多くいるのです。

私がまだ三十歳代前半の頃、製品の不良が二桁は当たり前の時代であった。その原因は素材にあることに気がつき製法を一気に変える必要を主張した。それにはかなりの試験や実験がともなった。だがそれに賛同する同僚はいても直属の上司はいなかった。しかし、飛び越えて事業部長や当時の社長に進言した。現在なら到底受け入れられてはいない、なぜならそのような責任と信念のある上司はいないからだ。もし失敗したらラインストップし復帰するには2～3日かかるのである。

ラインストップすれば数千万から億単位の損失を招くことにもなるのです。成功すれば逆に大きな利益につながる。直属の上司には責任があり、難しいことには係らないのが安全だからだ。

社長の許可により賛同してくれた数人の同僚や現場の協力により成功した。それによって大きく会社の前進にもなった。つまり部下が自信を持って取組みを説明しても、それを理解する能力すら無いのです。成功、不成功は別として責任を取る自信が無いのです。

時代の進歩に従って知識や勉強をしていないから理解できないのです。つまり、現在のやり方が一番よいと思いき、問題点すらわかっていないのです。今が一番良いと思ったら進歩はないのです。

最近（ここ十数年来）では企業でどの職場においても同じことをしている職場は大企業では全くありません。同僚が肝臓病で3ヶ月入院し退院してきたときには今までやっていたことが全く変わってしまっていて最初から教えてもらうことになった。なぜならたくさんの同業他社に負けられないように効率化しないと生き残ることができないからです。

同じことをやっているのは競争相手のいない官公庁・公務員だけなのです。年間計画にしても、報告書にしても企業では年間で達成可能な目標は多くて3～5項目です。

今でも私は記憶しているのですが。私が30代前半、今から約30年も前のことだ。

松下電器に協力会社としての品質計画書を要求され作成し持参した。計画書はA3の用紙5枚くらいにまとめ目標も10項目程度のもので日程計画まで作成し発表した。

ところが松下電器の品質管理の部長が公務員の計画書では100点満点だけどこれは企業では通用しないといわれたのである。目標が多すぎる3点に絞りそれも確実に達成可能なものまた、将来にわたって持続できる項目を選択し、確実に利益につながるもの、年間

いくらの利益になるのか数値化する。さらにデータは将来にわたって継続利用できるものにしなさい。しかも計画書はA4用紙一枚でそれ以上は時間の無駄である。その場でキャンセルされたのである。

計画した段階で松下電器から訪問され、そこで計画前どうするのか現場確認する。そのための書類も要らない口答説明である。

また改善の後も確認に来社その場合もまとめの資料（書類）は一切不要であり、眼で見る管理、目標どおり現場で改善されていけばよいのだ。それが毎年の診断なのだ。

将来にわたって必要なデータだけ記録が残っていればメモ紙で良いのだ。次のときその数値が改善されていけばよいのである。利益数値が上がればよいのだ。

まさに無駄のないやり方だ。今企業は計画や確認のための計画書やまとめは常日頃の記録がコンピューターにインプットすれば自動的にまとまる仕組みなのだ。計画やまとめに時間をついやすのは無駄な時間で利益に繋がらないからである。日々のデータがインプットしコンピューターで自動的に統計手法により自動的にまとまる仕組みだ。そんな計画やまとめの時間は次の新しいことに挑戦することに使うのである。

このような考え方はトヨタ自動車、ホンダ、マツダ、日立、特に進んでいるのは自動車関係・電気関係の企業、みな同じだ。

日本の官公庁が国際規格を取得できないのは将来にわたる方針や計画がなく、無駄な時間をかけて作った作文と金（税金）を使う計画ともらうためのデータ・書類だからで生きたデータは全くないのだ。またそのための官公庁に都合の良い間違った規定や規則・基準が作られているからだ。しかもそれぞれの部門に都合の良いように作られているのだ。企業では考えられない横の繋がりが無いのである。方針に沿った計画や規則、基準、縦横の繋がりが国際規格であり、書類よりも改善がスピーディーに繰り返し行われる仕組みなのだ。先進国の中でも一番遅れているといわれているのである。

書類を重要視しそれによって仕事が動いている、書類の印もその一つだ。昨年国際規格の取得で山口県の県配水管の製造会社から指導の依頼を受けたがそんな理由でお断りした。

企業ではイントラネットで社長以下関係者に同じ書類が同時（瞬時）にどこからでもメールで届き期限（時間）を切って1~2日で許可される仕組みだ。印もパソコンで押せる仕組みだ。したがって出張先からも全国の支店すべて関係者がいつでも見ることができ操作できるのである。急を要し、たとえ社長の都合により了解なくても許可されるしくみだ。

今時代は情報によって一刻を争うからで、企業の仕事が左右されるのである。数分遅れで商談が成立しないなどのケースは数多く、企業人であれば何度も経験されることだ。

官公庁の計画書とデータはお金をもらったら保管し行く末はゴミとなるのである。将来にわたって使えるデータではないのだ。（お金をもらうための書類作りだからだ）

私は定年退職するまで全く官公庁との係わりがなかったから気づかなかったが大企業からすれば2~30年も前やっていた遅れた手法が現在もいまだに使われていることに驚きと落胆をした。官僚の汚職が起こるのも無理もない。ご存知のように品質管理は日本で作られた（石川肇氏が考えた）手法だ、石川氏は実は品物の質でなくあらゆる仕事のやり方・機械・物・金・人間性を含めた質をいうのであったが当時日本人が協会を作るのにQuality

Control と名付け英訳では質を品質と訳したのだ。これは有名な話で、従っていまだに品質管理と呼ばれている。だが、今ではその理解の仕方は品質管理を品物の質と理解する人は専門化にはいない、品物を作り出す人の質を指しているのだ。従ってそのことが方針管理のもとにすべてに折り込まれているのである。会社方針から各すべての目標が繋がりのあるものなのである。会社の決算報告をご覧なれば理解できる。

もう十数年前から方針管理に関する書物がたくさん出ているがその手法は企業が使うものとして官公庁で全く利用していないのだ。昔企業も行ってた目標管理だから、経営安定化対策の書類、農地・水・環境の書類のような教科書を作るのだ。目標管理と方針管理の違いも理解していないからだ。

将来あるべき姿の方針がないから場当たりの目標を立てるのだ。問題が起きてそれに対して目標を立て解決しようとする品質管理で言う問題解決型の解決手法なのだ。国のあるべき姿から来る方針管理とは程遠い考え方なのだ。おまけに一年もたたないうちに修正を途中でしたり今の官僚自身が学生時代に習ったそのままの考え方なのだ。

時代がどのように進歩しているのか理解していないのである。時間をかけて無駄な書類作りをし、時間をついやせばお金（給料）になるのです。また良い文章を書き上司の気にいられれば優れた管理職になるのです。だがそれは本当に国のためには全く無益、不要なのです。問題はどうかしたらよい国にすることができるかなのです。

阿部政権の時、掲げられていた公務員制度改革をしなければならぬのは誰もがわかっていたはずですが、それもいつの間にかどこに消えたのかうやむやになってしまっているのです。それをする能力の人もいない聡明才弁型のまさに無責任な政治家のその場しのぎの言い訳だったのです。道路特定財源の問題もそのうちうやむやになるのです。官僚の天下りの問題など長期計画を立て改革し解決が必要だが到底期待できることではない。

教育改革もころころと変わり、学力が低下した科目の時間数を増やしたり、戦後の教育改革そのものに問題が発生しそれに対しての手当てに過ぎない。これまた将来的な方針も何もないのだ。低学年から英語を導入したり何の方針でどうするのかビジョンもなにもないこれも場当たりのものだ。

我々がまだ子供の頃には、子供たちの主体性、自主性を尊重しながらも、親には孝行せよ、目上の人には敬意をもって接せよ、兄弟は仲良くせよ、友人を信頼せよと教えられてきた。これは教育勅語の趣旨である。そういう価値観を持っていた親たちが子供を育ててきた。また、会社の経営者たちも、自分が受けてきた戦前の教育に基づく形で、会社という公の秩序、倫理を考えてきた。個の権利と自由を追求しながらも、社会全体の秩序や倫理が保たれルールとしてきた。ところがそういう価値観を背景にもつ世代が少なくなり、教育の崩壊、家庭の崩壊、政治家や官僚までもが崩壊して社会全体の崩壊の原因の一端はここにあるのではないだろうか。国家をいかに立て直すかという問題にまでなっている。

三つ子の魂百までというが、幼少の頃の刷り込みは良い悪いに関係なく知らず知らずのうちに遺伝子として埋め込まれていく、恐ろしいことだ。

そのことが解った（日本にいても駄目だ、住めないと気づいた）若者の多くは日本を見放し海外で活躍し、また追い討ちをかけるように一流企業の多くが優秀な人材を海外に派遣し拠点を海外に求めているのが現状なのです。私の周りにもたくさんそのような人がいるのも現状です。残っているのは定年を迎えた我々と年老いた老人、日本にしかおれない人たちがばかりなのです。また、問題になっている人口は減少しているのに医師不足も都会の優秀な医師は海外に、また、地方の優秀な医師も都会にと流れているのです。急に大学の医学部の定員を少なくしたのではないのです。

話が横道にそれましたが本論にもどします。誠実に努めることからもたらされる恩恵に対して、ありがとうという思いが自然にわいてくる。そのとき感謝のする事の大切さ、そもそも今自分が生きている、生かされている。そのことに対して感謝の心を抱くこと。その実践が私たちの心を高め、運命を明るく開いていくのです。もちろん「人間として正しい生き方」を心がける人でない限り感謝する心は持ち合わせていないのです。ありがたいと思う心には物事がすべてうまくいったときだけではなく、うまくいなくてもその心（感謝の心）は必要なのです。なぜなら人間には欲望があるからなのです。これで満足するする人もいれば、いくらやってもそうでない人もいます。感謝の心がない人はいつまでたっても幸福を得ることはできないのです。

宗教的な話になりますが、私が尊敬する藤田徹文先生の著書「わたしの浄土真宗入門」の中から同じようなことがありそれを引用させて頂き、農業法人 での人間関係について話しました。

お釈迦様も、私たちが、この「いのち」を本当によろこんで生きたいと思うならば、正しく生きる（八正道）に限ると教えていただきました。

正しく生きるとはどういうことでしょうか。

私たちの「いのち」は、他の「いのち」に支えられて生きています。どんな時でも、私たちは一人で生きていくわけにはいきません。相手があり、周りの人があり、自分にはかわりあいがないと思っている人も居てくださるから生きておられるのです。

例えば停電一つとっても、いきなり停電になり、水道は使えず、ご飯も炊けず、冷蔵庫は使えず、電灯も点かず、トイレも使えず、それら全て係わり合いのない人と思っている人がいるからで、そのありがたみは全く感じていないのです。

農業法人 に加入している元気な人でも、いきなり夫にしても妻にしても病にかかったら、農業どころか、誰かの（地域）お世話にならないといけません。ましてや自分ひとりの場合、自分が死んでも一人で棺桶に入るわけにも、葬儀を死んだ本人が自分でするわけにもいきません。何もない無人島で着るものもなく暮らせるのでしょうか。

ですから正しいとは、常に相手の身になり、周りの人の身になり、多くの人「いのち」の立場に立つということです。だから、ものを見るにしても、考えるにしても、話すにしても、生活するにしても、常に、相手の身になり、他の人（社会の人・地域の人）「いのち」の立場に立って生きることが、「正しく生きる」ということです。企業の経営者はいろんなセミナーなどでいやというほど聞いて、理解しているにもかかわらず、人格者として持ち合わせていない考えの経営者は自分の利を考えて不正をし、後ろに手が回る人もいます。

浄土真宗に限らず。あたり前のことが理解されていないだけだと思います。また、自分で気づこうとしないだけで、何のためにお寺に法話を聞きに行っているのでしょうか。また、宗教を抜きにしてもそのような人は逆にどう生きようとし、どう地域社会と向き合い、地域がどうなればよいと思っておられるのでしょうか、理解できません。

私たちは自分の利を忘れるどころか、他の利を忘れて、自分の利を追い求めて生きていく。自分中心の生き方しか出来ない。そのような人生を過ごす人は永遠に幸福とは無縁の生き方で幸せをつかむことは出来ません。自我に執られるのは、本当に信頼できるものを見失っているからです。自分の利だけを追い求めて、他の人も不幸にし、自分も不幸になっています。

ことは宗教に限ったことではありません。結論として、われわれが仕事をするにしても人生にしても一番大切なことは素直な心で物事を考え人間として正しいことを追求することが重要なのです。